

タイトル:平成 26(2014)年度 教育セミナー(第 10 回)

日時:平成 26 年 9 月 20 日(土)~23 日(火・祝)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「〈辺境〉のイスラーム—西アフリカの事例から」

荻谷 康太 (AA 研)

本セミナーでは、19-20 世紀の西アフリカのイスラーム知識人の動向に着目し、イスラーム圏における〈中心〉と〈辺境〉に関する認識の問題を考察した。

前半では、セネガル発祥のスーフィー教団であるムリッド教団と、その開祖アフマド・バンバ(1927 年歿)の思想を事例として取り上げた。ムリッド教団には、師のために労働する弟子がその救済を保証されるという教えがあると言われ、先行研究などの中には、この「労働の教義」がアフマド・バンバの独創であり、その源泉を彼の著したアラビア語著作の中に見出すことができるとする見解が存在してきた。しかし、本セミナーでは、アフマド・バンバの著作内の文言を具体的に検討し、併せて、著作内で展開される彼の思想がサハラ沙漠西部や西アジアの先達の思想を土台にしていた点を考察することで、上述のような見解が、イスラーム圏における〈中心〉と〈辺境〉との繋がり、すなわち西アジアから西アフリカへと広がる知の連関網を無視して、彼の著作の内容を歪曲して理解してしまった結果であることを明らかにした。そして、それが〈辺境〉の特殊性を前提としたり、過度に強調したりする思考の産物である可能性を指摘した。

後半では、19 世紀初頭のハウサランド(現在のナイジェリア北部及びニジェール南部に相当する地域)で成立したイスラーム国家、ソコト・カリフ国に目を移し、そこで展開されたメッカ巡礼に纏わる思想を取り上げた。メッカ巡礼は、イスラームの宗教的義務の一つでありながら、幾つかの条件が満たされない場合にはその遂行が免除される。メッカへと至る道の安全が保証されていることもそうした条件の一つとされ、遅くとも 12 世紀頃から、この条件を考慮したイスラーム知識人達の間では、マグリブやアンダルス、サハラ沙漠西部、西アフリカなどに住むムスリムにとって巡礼遂行は義務となるのか否か、更には、軍事ジハードを展開している国のムスリムにとって、巡礼の遂行とジハードへの参加のどちらが優先されるのかといった問題が議論されてきた。本セミナーでは、こうした巡礼及びジハードを巡るイスラーム知識人達の見解を検討した後、‘Umar Al-Naqar, *The Pilgrimage Tradition in West Africa: An Historical Study with Special Reference to the Nineteenth Century* (Khartoum: Khartoum University Press, 1972) で論じられた内容に依拠しつつ、メッカという〈中心〉から遠く離れた〈辺境〉のソコト・カリフ国の権力者が、巡礼遂行が困難な〈辺境〉における巡礼の代替行為、もしくは巡礼よりも優れた行為としてジハードを提示し、それを通じて、軍事力の維持・強化に必要な人的動員を実現しようとしていた可能性を検討した。そして、この検討を通じ、「〈中心〉と〈辺境〉の連関」と「〈辺境〉特有の条件」とが重なったところにしばしば〈辺境〉の地域的特殊性が現れ得ることを指摘した。